2017/12/24発行

富田講演・パネルトークに参加者共感!

第48回京都教育センター研究集会は、12月23日全体会を開催しました。現職、退職者、研究者、父母など72人が集いました。高垣忠一郎センター代表、河口京教組委員長の挨拶の後、本田久美子事務局長の基調報告につづき冨田宏治さん(関西学院大学教授)の講演がありました。

冨田さんは「いまこそ語ろう!憲法、核兵器、教育- "個人の尊厳"を手がかりに一」と題して、お話しされました。

はじめに解散総選挙へと追い込まれた安倍政権について、 あのドタバタでの解散総選挙、そして希望の党出現、民進党 の動き、立憲民主党の立ち上げと、まるでオセロゲームのよ



うに展開した総選挙だったと振り返り、市民が肝心なところでしっかり判断しているのは戦後民主教育の力だと力説されました。また核兵器禁止条約の成文ができるまでの議論はまさに議論していいものをつくっていくというものであった。そこに背を向けているのが唯一被爆国である日本政府だ。

核兵器こそ個人の尊厳を踏みにじる兵器だと強調されました。

後半のパネルトークは「教育ってなんだろう」をテーマに、パネラーの高校の英語教諭の西田陽子さんからは、免許も持っていない小学校教員が教えようと思えばおのずとデジタル教科書に頼らざるを得なくなり、企業もうけにつながりかねない。手作りの子どもに合わせた教材をつくりたいと話されました。小学校教諭の葉狩宅也さんは、具体的な道徳の授業を通して、子どもたちに考える授業をつくっていくことが大切。それはたとえ道徳の教科書を使っても工夫次第でできるはずと話されました。高校の演劇部顧問の中谷眞紀さんは、創作したいという生徒の思いを大切にし、言いたいことが言え、みんなで決めたことは守っていくということをしてきた。教育は、子どもの声をちゃんと引き出すことではないかと問題提起されました。討論のなかで、道徳の評価のことが話題になり、先生が納得するかなと思うことを書くということが出てくる。生活で経験したことが言えることが大事、子どものマイナスの言葉を丁寧に受けとめることが大事だとパネラーの方々が語られ、個人として尊重されることだとコーディネーターの西條昭男さんは締めくくられました。

《感想文から》

○ 冨田先生の話、わかりやすくて興味持てた。今の政治に絶望せず、よく分析して展望持つことが大



- 切だと思った。
- 日本社会・政治情勢、核兵器禁止を巡る世界のことを現状と見通しを楽しく教えてもらった。 頭も整理できてよくわかりました。緻密な資料の提示と分析に感動し、激励されました。
- パネルトークで、ますます大変 な学校現場に衝撃を受けた。教 師以上に子どもたちの競争は激 花しているのではないか。